

『老』と『親』とについて：言學によつて語る哲學

佐藤，通次

<https://doi.org/10.15017/2557010>

出版情報：文學研究. 21, pp. 38-53, 1937-12-25. 九州文學會
バージョン：
権利関係：



『老』^{オイ}と『親』^{オヤ}について

— 言學によつて語る哲學 —

佐 藤 通 次

—

追憶はすべてなつかしきものである。それも樂しかつた事ばかりが思ひ出となつかしいのではなく、當時はとも耐へられぬほど苦しかつた事や悲しかつた事なども、永い年月のうちに回想されるとき、すべて遠い昔のなつかしい夢となる。それが時間の徳であつて、現在に含まれる過去はことごとく絶對的に愛^{いと}しきものである。そしてたとひ過ぎ去つた事であつても今に切實な交渉をもつ事には、すなはちいまだ過去となりきらぬまなましい現實には、今の自己の相對的な悲喜愛憎の念がはたらくのである。

現在が過去をおのれの内を含むとは、過去を我とすることである。過去を我の内に含む相を人生において現するものは老^{ラウ}である。ウブの幼年期やナマ若き青年期はすべて老の中に含まれる。老人はありがたきもので、人は老いるに

従つて人の兄や姉や、親、叔父や叔母、先輩、長老などの身分を得て、おのづから弟、妹、子、甥、姪、後輩、若手などを愛しむ立場を得るのである。愛しむのはすなはちこれをわが身の内とするのである。

常識では青少年を未來のものとし、老人を過去のものとするのであるが、まことは人は老いるに従つて幼少時、青年期を過去として自己の内に含んでゆく。老が過去なのではなく、老の中に含まれる幼、少、壯が過去なのである。幼、少、壯の立場から見れば老がかへつて未來である。老は決して過去となり老衰することのない永遠に若き未來であるが、幼、少、壯が老の内において過去となり衰へゆくのである。

老の本質は未來の全一であり、幼少の本質は全一に含まれる過去の分一^{部分}である。それは老少の絶對的意味であるが、それが相對的時間の内にある人の屬性として現れるとき、その關係が逆になつて、幼児や少年はこれより老に達すべき未來のものとして、老人はすでに老いたる過去のものとして、現れるのである。

老は幼、少、壯と對等に對するものではなく、幼、少、壯を内に含みかつこれを超えるものである。この超えるといふことを相對の世界の階序の相に移して、老人は人倫において上^カの身分のものとされる。故に敬は畢竟敬老なのである。ただし老人は人に敬せらるべき身分をおのづから得るのであつて、老が過去を我とするといふのは、實は過去が自然に我の中に入り來るのである。老が自然的所與を超えて人格的體驗となるためには、老人がこの老の本質を自主的に實現せねばならぬ。老の本質を自主的に實現するとは、過去をおのづから我とする立場を逆にして、我をみづから過去とするのである。この捨身の行爲によつてのみ老の體驗が人格的體驗となるのであつて、その事がなければ、老いることはいたづらに「馬蹄」を加へることとなるのである。

我をみづから過去とするとは、幼、少、壯を相對的時間の現在において含むのみならず、絶對的時間の現在において自己の内に含み、かつこれを超えることである。相對的時間の現在において含むのは實は自己の過去の内にもつのである。幼、少、壯を絶對的時間の内に含んではじめて現にこれを自己の内に生かすことができるのである。

二

幼、少、壯を現在において生かすとは、自己にとつて他から與へられたものとしてこれらを自己の内に迎へるのみでなくて、みづからの自主的行爲によつてこれを自己の内に立てるのである。それはすなはち幼、少、壯をわが子として生むのであつて、このはたらきをなす老は親と呼ばれる。老と親とは邦語において同系である。

ドイツ語 Eltern 親兩 ももと die Älteren 老い であつて、alt 老いたる の派生語である。

親は子を自己の内に生むのであるが、その生む働きは具體的である故に、子は全一、半一、分一の三位の一を貫く存在として生まれる。その半一的・分一的契機によつて物格の肉體の子が現じ、親はその肉體の子に對する同じき半一的・分一的存在としてわが子をわが外に見る。しかしわが外にあるわが子も本質的には我そのものに外ならぬのである。

幼、少、壯を對格としておのれの内^{ソツ}に迎へ 自己を幼、少、壯に對する主格として幼、少、壯を超えるのが老の體驗である。老の體驗は眞實の生の道の往相であつて、これによつて多が一に歸せしめられる。しかも人格的老の體驗は必ず還相を伴ふのである。その還相^{げん}がすなはち對格を自己の生んだものとする親の體驗であつて、これによつて一が一のまゝ多として現するのである。

親は子を生んでこれをわが對格とするのであるが、子は純粹に被動的存在たる靜的な死物ではなく、一箇の客文章の主體たる動的な生物である。かく客體にして同時に主體なる人の存在が「身體」である。親の生ずる子は必ず身體の汝であつて、親は自己の内から死物を生することはできない。

物は對格の我（汝）のもつ對格の契機が抽象せられて彼物として見られるもので、我に對する偶然的存在として現れるほかはないのである。故に藝術的活動において作品を生むといつても、それは人間が物體または物質をあらたに創造するのではなく、物に人工を加へる意味の創作を行ふのである。また行爲において事を爲すのも、別に物をあらたに生ずるのではない。物はかへつて生動する「事」を抽象するとき、行爲者にとつては他から與へられた絶對の他者として示現するのである。

親は子を主體として生むのであるから、親の第一の願は子が生物として強くすこやかなることである。「父母は唯その疾まんことをこれ憂ふ」論語、爲政第一。それで親は子が生命の主體たるの實を發揮するのを無上の喜びとする。たとへば嬰兒を育てる親は、嬰兒のあどけない笑顔を愛で、泣顔を珍重し、おしつこを掛けられて感激するのである。幼くして死んだ子を葬るとき棺の中にくさぐさの玩具を入れてやるのも、わが子を死物として片付け得ぬ親心である。その際男兒の棺に犬や兵隊の玩具を入れ、女兒の棺に人形を入れるのは、死せるわが子に主の立場、親の立場を與へてやりたき心遣ひである。

親が子を主體として生むとは、子を全一として生むことである。全一はそれ自身完全なる一であつて他に求むるところがないから、全一と全一の相對は、相對の相を現しながらも相對に墮することなく、一箇の全一の絶對を現成

する。親は何人の子をもつも、一々の子と共にそれぞれ全一を成すのである。故に子が何人あるも、親の愛はその子の数によつて分割されることがなく、一々の子はそれぞれ親の全幅の愛を享受するのである。親子の關係は數の體驗を超える。鬼子母神が五百人の子のうち一人を見失つて狂亂したといふのはその象徴である。

du das siehst.
子の喜び

Ich sehe, dass
親の喜び

子は客文章ウツの主體として物に對し、物を自己の内に迎へて喜ぶのであるが、親は子が物を喜ぶのを喜ぶ。すなはち、子は物を喜ぶのであるが、親は事を喜び、子は單に喜ぶのであるが、親は子を喜ばせて喜ぶのである。そしてかく他の喜びを自己の喜びとして喜ぶ親の喜びがより大いなる喜びであるから、「與ふるは受くるよりも幸福さいはひなり」新約聖書、使徒行傳二〇・三五と言はれるのである。

三

親は子に對して絶対に反立することがない。たとへば「わが子は眼に入れても痛くない」のである。それは親が一面全一なる主格の立場に立ち子を分一なる對格とするので、子をおのづから自己の内に含むからである。親が子を生む還相に應じて子が親に歸入する往相が見られる。親が子を含む關係はこれを食に比することができらであらう。故に親はわが子を食べつてしまひたいほどいしく思ひ、また自然の盲目の愛に驅られる親は事實舐めるやうに子をかはゆがるのである。

親が子に對して絶對に反立せぬのは、親子がおのづから階序を成して上下に對面し合ふからである。それを時間の相によつて言ふならば、親は未來として主格の座に就き、對(むかひ)の座にある子を見るのであるから、兩者の間には絶對に時間の斷絶が存して、同所にあるといへども相容れるのである。これに反して、對格の座にある二箇の物體は不可入性の理に支配されるから、同時に同所を占めることができない。故に親^{生きた者}が自己の親の立場を忘失して單^{生きた者}に人たる者として子^{同じく、生きた者}に對するときは、兩者の間に反立争闘が生ずる。俗には親子の争などといふ言葉も用ひられるが、それは本質的には誤用であつて、實は他から親子として見られる關係にある抽象的な人^{ヒト}と人^{ヒト}との争なのである。親たり子たること(自然的であれ自主的であれ)自己の立場であるかぎりには、親子が反立するといふことは不可能である。また絶對に反立せぬものを親子とはいふのである。

人間以外の動物には親子の關係が眞實の意味では存在しない。親は仔を生んだ當初には身を挺して仔を保護し、自己の食を節して仔を養ふのであるが、それは本能に驅られて行ふ無自覺の行爲たるにすぎぬ。仔が成長して親と拮抗するにいたれば、すなはち親と對格において並列するにいたれば、親は次第に自己の全一的立場を忘れて分一的存在に墮し、仔と食を争ふやうになるのである。

傍輩からは嫌^{いや}な奴として疎まれる人間をも、その親はわが子として愛^{いづく}しむのである。傍輩はその者といはば對格において並立するので、これと反立するのであるが、親から見れば、わが子が生まれつき好ましからぬ性格であるのも、子の責任とは考へられず、かへつてその性格の故に他から疎まれるわが子がいとほしいのである。

人がレールの上に立つて、突進し來る汽車を迎へるならば、人と汽車とは必ず衝突するのである。しかしもし汽車

の來る前にそこを通り過ぎるならば決して衝突することがない。人も汽車も同所に在つたのであるが、人がそこに在つたのは汽車よりも過であるために衝突を免れるのである。かくのごとく、反立衝突を避けるためには、對立する兩者の間に絶對的時間的斷絶がなくてはならない。その斷絶を自然の親子はおのづから行ぜしめられ、人格の親子はみづから行するのである。

人格の親は自己を過去とし、子において未來を生む。それはみづからをすでに位牌として子に對するのである。方丈記にさる年の饑饉のありさまを敘したなかに、その實相がそのまま相對の世界に具現せられた例が見えてゐる。「又あはれなること侍りき。さり難き女男など持ちたるものは、その思まさりて、志深きは必ず先だちて死にぬ。その故は、わが身をば次になして、男にもあれ女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま／＼乞ひ得たる物を、まづ譲るによつてなり。されば父子あるものは定まれる事にて、親ぞ先だちて死にける。……」

自己を自主的に過去とする人格は、その行爲においても主動者であるから、自己を對^{むかひ}の座に立^たするといへども、依法として主格であり、その本質は未來である。そしてその未來は過去を行する以前の未來とはことなり、すでに過去を含んでしかも過去に墮せざる未來である。眞實の未來とはかくのごときものでなくてはならぬ。そしてそれは「現在^{現在}の劫に過去未來の劫を攝す」ところの華嚴經、十地品、永遠の今である。人格の親とは永遠の現在者にほかならぬ。そして自然的立場の親はそれを豫感するものである。

自然界の親が子を生むのは死物を生むのではなくて生き物を生むのである。子はそれ自體親の身分をおのづから備へもち、時到来ればおのれも子を生んで親となる。故に子を生むことの中には親を生み未來を生むことがおのづから含まれてゐる。人格の親と子の關係を自覺文章についてみると、本文の主格が親であり、對格が子であるが、こ

の關係を相對の世界^{自然界}に移すとき、子は客文章の主格となつてまさしく親の身分を示すのである。

Ich sehe mich. 子
Ich sehe, dass du... 子
親 親
親の身分を告げるのである。(ドイツ語 Vier Wände beschreiben 〓 呱呱の聲をあける。)

自然界の親と子とを^{イチ}一の格によつていへば、親は全一であり、子は分一である。ところで人格の

子は分一者の格を維持して下座を行するのみで、その實全一者であるから、人格の親子の對面は全一と全一との對面であり、従つて唯一絶對の全一の現成である。

Ich sehe mich. 親 子
知 見 行 生
る す 爲
るのも生むのも行爲であるが、見るを知とし生むを行として對立せしめるとき、親は知の立場を代表し子は行の立場を代表して、親子の對面において知行を合一せしめるのである。

子が行の立場を代表するのが人格的行爲であるから、人格的行爲とはその本質上子が親を生むことにほかならぬ。自然界の動物は Junge werfen (仔を投げ)し、人類の女人も子を生み落すのであ

るが、人格の親はみづから子をとし子を親としてこれを上の座に生み上げるのである。

相對の世界においては親が子を生むが、絶對的體驗においては子が親を生むのである。親は本質上その存在を子によつて受けるもの、子によつて生まれるものである。故に人格的體驗にあつては親はかへつて被動的・消極的立場のものとして把握される。たとへば邦語において敬語に被動式を用ひるのがその一例である。「入らつしやる」「聞こしめさる」「みそなはせらる」

人格の子が親を生むとは、分一的・半一的限定を受けてもつ生、マレタル子の分際の我が自主的行爲によつて全一の我を實現することにほかならぬ。親の生まるるさまは、靈前に香花をたむけて禮拜するとき魄靈が髣髴として現前するがごとくである。

人格的な親が被動的・消極的な位格を持するといふのは、とりもなほさず、自己を上座の主格とせぬといふことである。食の體驗にあつては我はもつばら主格の座に就いて物格の意味の汝を見るのみで、汝によつて見られる我をわが分際とすることがない。また性の體驗にあつては、對者に我と對等のものを見るといへども、なほ對者をわが性欲の満足の手段とし我をもつばら主格の座に就ける立場を捨てぬ。これに反し、我を見る獨立の簡體をわが子として自己の外に生む座は、おのづから下座を行ずるものであつて、生ムは親を生むのであるといふ眞理を具現するのである。

Ich sehe mich.
——捧げる

る。我を見る簡體は我を對格に置いて見る主格、すなはち親の意味のものであるほかはない。しかも母はわが子の誕生のときから子を親としてこれに仕へるのである。母が子に乳を與へるのは子を主格としみづからをその食物として捧ぐることにほかならない。

Ich sehe mich.
——迎へる

すべて與へるといふことは本質的には捧げることで、常に對格の分際において主格に對して行は

れるのである。主格は受動的にはただ受け又は迎へるのみであり、能動的には愛しむのみであるのを本質とする。新約聖書ルカ傳十五章に表現するごとく、さまよへる子を迎へてひたすら喜ぶのが親の眞實の立場である。

親の喜びは汝において我そのものを見る喜びである。これに比すれば、食の喜びおよび性愛の喜びは、自己にとつては興へられたるところのものである他者をおのれの内に迎へる喜びであつて、かへつて被動の喜びである。捨身の悲しみによつて汝を自己の外に生み、しかもなほこれを自己と見て愛^{かな}しむのが人格の愛であつて、それを生物の地盤において映すのが親子の愛なのである。

人格の愛の對象はあらゆる意味においてわが手段とならぬもの、従つてその對象に對して自己が一切主動的立場をもたぬものでなくてはならぬ。故にその對象は我の外に立ち我と同等の自主人たるもの、従つてかへつて主格たる我に外ならぬものである。自然の親が子を生むのはかかる自主人の豫感をわが子として生むのである。またかかる自主人と對面し相會するのが生の具體的な圓環を現する人格的な喜びである。「朋あり遠方より來るまた樂しからずや」論語、學。子^こを愛^{あい}づる親の喜びはこの人格的對面の喜びの原型である。

人格的の親の本質は生^うム者^{モノ}たる永遠の現在者たることに存する。生物的生における親は生^うミタル者^{モノ}であつて、生^うムといふ能動的立場を過去の形において具現するものにすぎない、それは親を低次の世界に反影するものである、それ故人の親にして親たるの實なき者は人格的には親たらず、かかる親に仕へて子の本分を全うする子がかへつて人格的に親たる場合も生じ得るのである。

五

ウブの生は全一 ただし抽象的全一 が分一を自己の内に攝取する生である。この生に屬する食は自己が他を食つて喜び他が食はれて悲しむのみの一方的體驗である。ナマの生は半一が他の異質の半一と合して一の全一 ただし抽象的全一 を成す生である。この生に屬する性愛は、汝を一應自己と同等の存在とする故に、他を喜ばせる境地をおのづから現じてゐる。それは汝を生ず捨身の行の豫感である。人はナマの生に入り、人の世のものを思フ身 オモ となるとき、男も女もすべて親を孕んで身重 オモ となるのである。人格の世界は自主的に身重の状態を結了して親を生むところに展開するのである。

ドイツ語の *schämen* 生む は子を胎内にもつ、(—*hären*, 英語の *to bear* に對應) ことを結了 (*ge*) する意である。人生のあらゆる善美は愛でたく親を生んで身二つとなるところにあらはれ、あらゆる惡は胎内の親を闇から闇に葬るところにあらはれる。惡の本質は墮胎である。またあらゆる醜は身ごもれるみにくき姿を人の目にさらすところにあらはれる。美しきものは二にして一の往相と、一にして二の還相とをもたねばならぬ。還相を伴はぬ往相は、單に抽象的・豫感的に汝を我とするにすぎず、そこには私の捨身がないから、眞實の往相たることができず、ナマ生きな「自得」の域を脱することがない。従つて醜いのである。

藝術的美といふものも親の意味の子を生むところにあらはれる。道德の善は理智的反省においては人 ヒト として見られる汝を上座に生んで成るのであるが、藝術の美は理智的反省においては物 モノ として見られる汝を上座に生んで現するのである。物を素材として親を生んで身二つになるのが藝術的體驗であり、かくして生まれたる作品が美しきもの

である。藝術的創作の眞の意味は、一刀ごとに三禮するといふ佛師の姿や、注連繩を張り齋戒沐浴して槌を揮ふ日本刀の刀匠の姿にこれを見ることができであらう。そこには下座の行の構へがあるのである。

總じて藝術と非藝術の本質的の相違は、そこに汝に奉仕する捨身の體驗があるか、又は單に自己の意樂に奉仕するのみであるかに存するといつてよい。その事はひとり藝術的創作の場合のみでなく鑑賞の體驗にも通ずるのである。

私は人格界を成す原理として孝を考へるものである。孝は老の省畫と子との會意で、子が老（＝親）を負ふ意味であらはず。親によつて生まれた子が親を扶養しこれをいたはるのが孝である。イタハルは傷ハル、病ハル、愛ハルであつて、愛すること、愛シムことである。そして愛する、愛しむは主格の働きであり、親の思であり、未來の配慮である。對^{むかひ}過^かの座に生まれたる子はただ愛ハシキもの、愛シキもの、愛シキものである。

我々が傷を負つて痛ク感じ、痛ヅキを得て苦シミ、悲シミに悩むとき、痛く感じ、苦しみ、悩むものは主格である、私が手に傷いて手が痛イのでなく、手を對格とする主格、つまり私の肉體を子とする親なる私が手を愛シク思ふのである。捨てられた子猫が哀泣してゐるとしても、それは子猫が啼いてゐるのではなく、子猫に於ける親がわが子の破滅を愛シンデ泣くのである。幼な兒の啼泣にも親の泣き聲が本音として聞かれる。

親を愛ハリ愛シム子は親をわが生める人格の子とするのである。孝によつて生の圓環が成就され、生みツ放し生れツ放しの被動的・一方的・關係が止揚され、生物または動物の意味の人が人間の意味の人に轉換する。孝は自然の物格

を自主的な人格に高める道である。

しかも人格とは神格にほかならぬ。伊藤仁齋は病中の母に仕へること三年間、奉養至らざるものがなかつたので、母はその瞑するに當つて、合掌して我子に禮をなしたといふ。それは母がわが子ながらも孝子において一柱の神體を拜したのである。

中江藤樹が孝の字を解いて、「天地のいまだ開けざる大虚の理を老とし氣を子とす」孝經心法としたのは深い哲學的解釋である。未來の本質の親はいまだ開けざる大虚の理であり、生まれたる子はまさしく理の氣に發したるものである。對むかひの座に生まれた子が親を子とするところの孝は、過去を未來とし未來を過去とする生の圓環を行じて「過去の一切劫を未來今に安置し未來現在の劫を廻して過去世に置く」華嚴經、離世間品、永遠の今を現成するものにほかならぬのである。

易よの上た象傳に「泰は小は往き大は來り、吉にして亨ととは、則ちこれ天地交りて萬物通するなり。上下交りてその志同じきなり。」(中略)否はこれ人に非あらず、君子の貞に利よしからず、大は往き小は來るとは、則ちこれ天地交らずして萬物通ぜざるなり、上下交らずして天下邦尤なきなり」と説いてある。小が往き大が來るのは天地が全くその位次を變へるのであるが、しかもこれが人の立場、君子の美德であつて、泰と名づけられ、よくその功を擧げることのできる象とされるのである。生まれたる我が生むものとなり、生みたる親をかへつて子によつて生まれるものとする孝は、まさしく上の「吉にして亨る」上地下天の道に合するのである。これを現代哲學の用語で云ふとき、生の圓環となるであらう。

孝は人生に於ける生ム、生マレルの自然的所與を地盤としてその原型的な姿を示現する。「孝子の至りは親を尊ぶより大なるはなし」孟子、萬章上。「大孝は終身父母を慕ふ」孟子、萬章上。「父母は我家の神我神と心つくしていつけ人の子」本居宣長、玉矛百首。

しかし孝は自然的所與の父母に對する道にとゞまるものではない。たとへば孝養至らざるなきわが子において神を拜した仁齋の母もまさしく人生の孝子である。孝の體驗にあつては「一切の男子はこれ我父、一切の女人はこれ我母」梵網經である。人格界の事がらはすべて孝道の實現ならざるはなく、人格界を映す天地自然の理法もことごとく孝の原理の發現ならざるはない。「孝は天の經、地の義、民の行なり」孝經、三方章。「それ孝は天下の大經なり、それ孝は之を

置けば天地に塞がり之を衡ふれば四海に衡はり、之を後世に施せば朝夕なし」大戴禮記、曾子大孝。「天地未だひらけざる太虚

の時には、理を老とし氣を子とす。天地すでに開けては、天を老とし地を子とす。(中略)山を老とし川を子とす。(中略)

君を老とし臣を子とす。夫を老とし婦を子とす」熊澤蕃山、集義和書卷八。

孝は一切の徳の頂上である。「それ聖人の徳は何を以て孝に加へんや」孝經、聖治章。「孝とは高なり、天高けれども孝

よりは高からず、孝とは厚なり、地厚けれども孝よりは厚からず。(中略)此經妙法蓮華經は内典の孝經なり」日蓮上人、開眼鈔。

「孝は徳の本」孝經、開宗明義章であつて、「萬事萬物の内に孝の道理備はらざるはなし」中江藤樹、翁問答。

一切の徳は孝徳の顯現である。「居處莊ならざるは孝に非ず、君に事へて忠ならざるは孝に非ず、官に蒞んで敬ならざるは孝に非ず、朋友信なきは孝に非ず、戰陣勇なきは孝に非ず」大戴禮記、曾子大孝。

例として人倫の徳を若干とりあげてみるも、儒教において孝と併べ稱する「悌」は、兄弟姉妹の階序において孝を實する徳であつて、弟妹の立場をマコトの座として、わが心をそこに就けるのである。「孝弟（悌）はそれ仁の。本か」論語、學而第一「敬」

は汝を親として上の座に生む徳である。「和」は上の座に親を生んでこれに親しむ徳である。「恕」は下の座に見られる汝を上座に親として生み直し、もとより親たる我と合一せしめる徳である。「武」は下の座に見られる汝が實は下の座にあるべきものでないことを見破り、我と同じく上の座に就くべきことを汝に命じ、汝を親として立する徳である。

孝はわが國人の體驗によつて深化されたる忠においてその最高段階を具現する。忠は支那ではもと至誠心の義であるが、わが國人の體驗によつて至誠心の最高の顯現たる君への忠に高められた。人の子と生まれて生みの親を自主的にわが親とするのは第一段の孝である。親子はもと自然の地盤において一體の我であるから、親子の縁は一世といふ。（ただし人格の體驗は基數を超えるから、その實未來永劫である）。もと他人である男または女をわが夫、わが妻として夫婦の道をなすが第二段の孝である。故に夫婦の縁は二世といふ。（その實未來永劫である）。しかるに夫婦にはなほ汝を異性としてこれを自己の欲望の對象とする立場があらはに含まれ、夫婦合して一の我となるべきことは自然の地盤においてすでに與へられてゐる。これに反して、君臣主従の大義は、全然愛慾によつてつながれぬ彼と彼との間に、自然的所與よりも高次にしてかつ具體的な歴史的所與を地盤とする人倫の階序の相を現じて、自主的人間の見識により一が君一が臣となつて上下の座に就き、君臣の義に父子の情をこめて對面し合ひ、君臣一如の吾を現成せしめるのであつて、これが第三段の最高の孝である。これによつて主従の縁は三世といふ。（その實未來永

劫である。忠において生の圓環が最も大規模にかつ最も崇嚴に實現せられるのである。親子夫婦は私人の立場において行ぜられる孝道であり、君臣主従は人間の本質が私人を超えたる公人であることの意義を發揮する立場において行ぜられる孝道である。「大義親を滅す」左傳、隱公四年とは君臣の義が親子の情を超えることをあらはす。この人生にあつて現實に行爲する我々の道は「盡忠報國」の四字に盡きるのである。一切の學問、一切の觀法はその眞理を體認するよすがとなつてはじめて生きるものであるといつてよい。（完）